

巻頭言

日本台湾交流協会が編集・発行している雑誌「交流」の8月号をお届けします。

7月30日の夜、かねてより闘病中の李登輝元総統がご逝去されたというニュースが飛び込んできました。元総統閣下におかれては97歳（数えて98歳）というご高齢であり、本年年初から入院加療中でした。生涯を通じて台湾の民主化に尽くされ、また日本との関係強化に尽力された故総統に改めて衷心よりお悔やみ申し上げます。今号においては巻頭に当協会大橋光夫会長の談話を掲載させていただくとともに、7月31日に産経新聞出版社から「李登輝秘録」を出版された河崎眞澄氏による特別寄稿を掲載させていただいております。

また、本号においては、当協会理事でもある早稲田大学若林正丈名誉教授による特別寄稿「台湾のあり方」を見つめ続けてきた世論調査」を掲載させていただいております。李登輝元総統が取り組まれた台湾民主化の成果は、まさに台湾の方々の自己認識として具現化されてきました。若林名誉教授は1990年代から今日の蔡英文第二期政権までの長期間を見渡して、いかにして台湾人の方々の自己認識が変化してきたかを的確に俯瞰し分析されています。改めて振り返ると故李登輝元総統が台湾で初めて民主選挙による総統選出を行った1996年に台湾の人々の自己認識において「台湾人」意識を持つ方の割合が「中国人」意識を持つ方の割合を上回る等、世論調査はまさに台湾人・台湾社会を映し出す鏡として機能してきたことがわかります。若林名誉教授がおっしゃるように、今後の世界における政治構造の変化をこの世論調査がどう映し出していくのか、大変注目すべき価

値があると思えました。

私は2014年から2017年まで3年間当協会台北事務所勤務する機会をいただき、その際、ロータリークラブの会合等で故李登輝元総統のお姿を拝見しご挨拶をさせていただく機会があったのですが、立ち入ったお話をさせていただく機会は残念ながらありませんでした。しかし、故李登輝元総統と長年行動を共にされてきた日本統治時代生まれの台湾人の方にいろいろとお話を伺うチャンスはありました。その際、この方がおっしゃった言葉でとても印象に残っているのが「台湾は真田昌幸なんですよ。」という言葉でした。真田昌幸はその後NHK大河ドラマ「真田丸」で草刈正雄さんが演じられたことで全国的にもよく知られることになりましたが、もともと甲斐武田氏の家臣でしたが戦国末期の世の中を生き延びるために武田氏滅亡後は状況に応じて徳川、上杉と結び、その後豊臣秀吉の配下となり、関ヶ原では真田家が東軍、西軍に分かれる形で家名を江戸時代を通じて維持、明治維新まで生き延びた知略に富む信州の武将です。この方がおっしゃったのは、台湾はまるで真田昌幸のように状況を冷静に観察し、必要とあれば周辺の大国である日本や中国、さらにアメリカとうまく結びつくことにより台湾という存在をしっかりと維持・発展させていく、そうした智力と気概を持っているということではなかったかと思えます。李登輝元総統もおそらく様々な状況を見極めつつ着実に台湾の民主化と台湾人意識を高めることに智力と胆力を尽くされた生涯であったのではなかったかと拝察する次第です。

中台関係は1999年に故李登輝元総統がいわゆる二国論を表明したことから一時断絶するのです

が、その後 2005 年から国民党と共産党という政党どうしの交流という形で再開します。2005 年以降現在に至る兩岸関係の流れについても、今号では京都女子大学の松本充豊教授による解説を掲載しております。

政治関係以外では、注目が集まる台湾の新型コロナウイルス感染症対応について駐日台北経済文化代表事務所周立経済部長及び台湾貿易センター陳英顕東京事務所長による解説インタビューを掲載しております。いずれも他では得られない貴重な情報が満載と自負しておりますのでぜひご利用ください。

本誌は印刷媒体以外に電子媒体でも発行しております。当協会ホームページの「日台関係・台湾情報」欄にカラー写真入りでバックナンバーが収載されていますのでぜひご活用ください。本誌をよりよいものにしていくためにも、読者の方々におかれましては、各記事をお読みになったうえでの感想やご意見ご要望を当協会ホームページメールフォーム (<https://www.koryu.or.jp/contact/>) あてにお気軽にお寄せいただければ幸いです。

2020 年 8 月 15 日
公益財団法人日本台湾交流協会
専務理事 花木 出